



Title	コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達
Author(s)	遠藤, 史
Citation	北方人文研究, 10, 129-143
Issue Date	2017-03-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65823
Type	bulletin (article)
File Information	10_10_endo.pdf



[Instructions for use](#)

コリマ・ユカギール語の引用構文とその発達

遠藤 史
(和歌山大学)

1 はじめに

ユカギール語は北東シベリアに話される、言語系統的には孤立した言語である。ユカギール語は、帝政ロシアの東方進出の時期には北東シベリアのかなり広い地域で使われていたと推定されるが (Jochelson 1926)、その後分布域は大幅に縮小した。現在まで存続した2つの主要な方言群のうち、コリマ川上流地区に住むユカギール人 (自称 *odul*) によって話されているのがコリマ・ユカギール語である。

コリマ・ユカギール語の基本的語順は SOV 型である。ここから推測されるように、複文では一般に、従属節は主節に先行する。しかしながらこの言語において、発話を直接引用する構文 (以下、引用構文と呼ぶ) には並立するいくつかの構造が見られるばかりか、その中には以上の類型の特徴と必ずしも合致しないものも認められる。複数の人物・動物・妖精や怪物などが登場するコリマ・ユカギール語の民話テキスト中で引用構文が比較的多用されることを考えるなら、このような状況は統語論全体との関連の上でも興味深い。この論文では、コリマ・ユカギール語における引用構文を、現代のユカギール語と、約1世紀を遡った過去のユカギール語の双方において観察する。さらに、両者の対照から類似点と相違点を探るとともに、過去から現在に至るコリマ・ユカギール語の引用構文の通時的発展について考察する。

データの細部を観察する前に、まず引用構文の全体像を見渡しておこう。この構文について最も詳細な記述を行っているのは Maslova (2003: 500–505) である。この記述に従えば、コリマ・ユカギール語の主要な引用構文にはいくつかの種類が認められる。それらを文例とともにあげる。

第1の種類は「短い引用」(short quotations) と呼ばれる。この構造では、発話そのまま引用され、その後に動詞 *mon-*「言う」あるいは、より稀に他動詞の発話行為動詞が続く。

- (1) *juö-nu-lle* *juö-nu-lle* *omo-s'* *mon-i*
[see-IPFV-SS:PFV] [see-IPFV-SS:PFV] [good-INTR:3SG] say-INTR:3SG
'He looked at it for some time and said: It is good.' (Maslova 2003: 500)

- (2) *kin-tek* *tamun tāt* *l'e-l?* *joules'-l'el-u-m*
[who-PRED that CA be-SF] ask-INFR-0-TR:3SG
"Who has done it?" (she) asked.' (Maslova 2003: 501)

この構造が「短い引用」と呼ばれるのは、この構造で引用される発話が1つの定形節を含む程度の長さに限られるからである。

第2の種類は「長い引用」(long quotations) と呼ばれる。この構造では、発話行為動詞が先

行し、その後に発話の引用が続く。

- (3) *jowle-d'ā-je tet čāčā+taŋ-pe kel-ŋi?*
 ask-DETR-INTR:1SG your elder.brother-that-PL come-INTR:3SG
 ‘I asked: “Have your elder brothers and the others come?”’ (Maslova 2003: 501)
- (4) *epie met-in mon-i, id'ī ōžī kečī-k!*
 grand.mother I-DAT say-INTR:3SG [now water bring-IMP:2SG]
 ‘Grandmother said to me: “Now bring some water!”’ (Maslova 2003: 502)

この構造が「長い引用」と呼ばれるのは、この構造で引用される発話の長さが第1の種類のものよりしばしば長いことがあり、1個から数個までにわたる節からなる発言の引用を許容することによる。

さらに、この第2の種類 of 拡張として、引用される発話が単語 *monut* —これは動詞 *mon-*「言う」の副動詞—でしめくくられるタイプの構造がある。このタイプは上記の2つの種類を組み合わせたものとも考えられよう (Maslova 2003: 502)。

- (5) *tittel met-kele edie-s'-ŋā, kel-u-k, mon-u-t*
 they I-ACC call-ITER-3PL:TR [[come-IMP:2SG] say-0-SS:IPFV]
 ‘They were calling me, saying: “Come!”’ (Maslova 2003: 503)

単語 *monut* はまた、引用される発言の途中に挿入されることもある。

- (6) *jaqa-delle numö-ge n'ied'ī-l'el tāt-mie-d'öd-ek*
 [arrive-SS:PFV] house-LOC tell-INFR(3SG) [that-QLT-SBNR-PRED
juö-me mon-u-t, āče-gi kurčej-n'e n'ahā
 see-OF:1SG] [say-0-SS:IPFV] [deer-POSS crane-COM together
amd-ō-t qod-ō-pe-gi
 [die-RES-SS:IPFV] lie-RNR-PL-POSS]
 ‘She returned home and said: I have seen such a thing, she said, his deer and a crane lying dead together.’ (Maslova 2003: 503)

なお以上に続いて、ごく稀に生じる種類として、他動詞に続いてその目的語にあたる内容を示す節が現れる例があげられている。

- (7) *juö-m olhujpe-lek ohō-ŋi-l šöjnube-ge amun-pe-lek*
 see-TR:3SG [bowl-PL-PRED stand-3PL-SF] [entrance-LOC bone-PL-PRED
qodō-ŋi-l
 lie-3PL-SF]
 ‘He saw: there stood bowls, there lay bones near the entrance.’ (Maslova 2003:504)

ここでは他動詞 *juö-*「見る」の知覚の内容として後続する2つの節がふさわしいと考えられているのであろう。しかしながらこの最後の例は、発話を引用したものと解釈することは困難であろう。それゆえ、ここまでに概観した構造と同列に扱うことには無理があると考え

る。したがって本論文では、この最後の例は引用構文の範囲からは除いておくことにしたい。

以上、Maslova (2003) の記述に基づいて引用構文の諸構造を概観した。これまでに出版されたコリマ・ユカギール語のテキスト集においても、また筆者自身の行った調査によっても、(1) から (6) までにあげたような例は、頻度の差はあれ比較的多く生じることが確認できる。したがってこれらの構造は、体系的な考察の対象とすることが可能であろう。以下、議論の便宜のため、上記の記述を整理し、引用構文を次の3つにまとめ、それぞれに名称を付しておくことにする。

- (8) a. [引用] 発話行為動詞 (引用構文 A)
 b. 発話行為動詞 [引用] (引用構文 B)
 c. 発話行為動詞 [引用] *monut* (引用構文 C)

ここで (8a) (引用構文 A) は上での「短い引用」に、(8b) (引用構文 B) は「長い引用」の前半に、また (8c) (引用構文 C) は「長い引用」の拡張にあたる。C の構文を別に立てる理由は、副動詞 *monut* を使うことによって統語構造が複文へと拡張された結果、A と B に比べ、格段に複雑な構造が現出しているからにほかならない。なお、(8) における「引用」とは、発話を直接引用している部分を指す。テキスト資料を見る限り、時には発話が間投詞1つに限られるような場合も見られるが、適切なプロソディーを伴った発話の断片であると見なすことができるので、このようなものも引用に相当すると考えておく。

この論文の構成は以下の通りである。第1節で行った引用構文の概観に基づき、次の第2節では現在のコリマ・ユカギール語の引用構文について、テキスト資料における各構文の生起の状況を観察する。続く第3節では、今から約1世紀を遡る過去(19世紀末～20世紀初頭)のコリマ・ユカギール語の引用構文について、同じくテキスト資料における各構文の生起の状況を観察する。さらに第4節では、両者を比べて類似点と相違点を見出し、そこからコリマ・ユカギール語における引用構文の通時的発達についての考察の可能性を探りたい。

検討したテキスト資料は以下の通りである。まず現在のコリマ・ユカギール語については、Maslova (2001) (以下 MSK と略) に収録されている5篇のテキストの中から、引用が比較的多く含まれている長めのものを3篇選んだ(テキスト1、4、5)。これらはいずれも同一の母語話者が語ったテキストである。また過去のコリマ・ユカギール語については、Jochelson (1926) に収録された10篇のテキストを選んだ。同書はユカギール民族誌であるが、言語的な情報もふんだんに含んでおり、特に原文を収録したユカギール民話のテキストは言語学的にも貴重な資料である。これらは現地調査の折、1901年から1902年にかけて、現在のコリマ・ユカギール語が分布する地域に住む話者たちが語ったものであることが、テキストの末尾に記された注から確認できる。

2 現在のコリマ・ユカギール語における引用構文

Maslova (2003) の記述は現在のコリマ・ユカギール語を対象としているので、テキスト資料と文法記述の間に大きな齟齬は見られない。ここで検討すべきは、その細部であろう。具体的には、前節で整理した3つの引用構文の出現頻度や、引用構文が現れる文脈などの検討である。以下の考察では、論点をこれらの細部にしぼって見ていく。

2.1 引用構文 A

引用構文 A は、引用に続いて発話行為動詞が現れる構文である。今回検討した3篇のテキスト資料から見る限り、引用構文 A は実際のテキスト中に出現はするものの、その生起は少ない。今回の範囲では4例に限られる。テキスト資料中に現れたものから2例をあげる。ともに発話行為動詞は *mon-*「言う」の3人称複数である。

- (9) *qollume šil'le-ŋot gude-te-j, mon-ŋi.*
 soon snow.crust-TRNSF become-FUT-SN(3) say-PL:SN(3)
 ‘They said: “Spring will come soon!” [MSK1-51] (ハイフンの後は文番号)
- (10) *leŋ-de-lle uŋžū-t-ī-l'i, mon-ŋi.*
 eat-DETR-SS:PFV fall.asleep-FUT-SN-1PL say-PL:SN(3)
 ‘“We’ll have a meal and go to bed,” they said.’ [MSK5-46]

これらの例では、前節にまとめた記述の通り、引用の長さは短い。その長さについては、この2例に見るように、複文でもごく短い節連鎖ならば許容されることがわかる。さらに次の例では、引用として疑問文が現れている。

- (11) *ta-mun-ŋin tude-l t'umu pundu-nnu-l'el-u-m, qodo*
 DST-NR-DAT 3SG-NOM all tell-HAB-INFL-0-TR(3) [how
ā-te-met, mon-nu-l'el,
 make-FUT-SN(3)] say-IPFV-INFR(3)
 ‘He would tell them everything they should do.’ [MSK4-47]

このような疑問文引用のケースでも発話行為動詞として *mon-*「言う」が使われていることからわかるように、引用構文における無標の発話行為動詞は *mon-*である。

2.2 引用構文 B

引用構文 B では、発話行為動詞に続いて引用が現れる。この引用構文はテキスト資料中に現れる頻度が最も高く、今回調べたテキスト中での現れは20例を超えている。その中から3例をあげる。発話行為動詞として、最初の2例では *mon-*「言う」が、引用が疑問の意味を持つ最後の1例では他動詞 *joules-*「～を尋ねる」が現れている。

- (12) *ta-mun-ŋin taŋ pulut-pe mon-nu-l'el-ŋi:*
 DST-NR-DAT DST:AT old.man-PL say-IPFV-INFR-PL:SN(3)
 ‘*qod-ā-t-ōk? kebe-s'e šoromo-pul.*’
 how-make-FUT-ITR.1PL depart.PFV-SN person-PL
 ‘These old men replied: “What can we do? These people had gone away” [MSK1-72, 73]

- (13) *tā n'ied'i-t t'umu mon-tji omnī-n t'om-ō-d'e-pul: "d'e*
 DST talk-SS:IPFV all say-PL:SN(3) [people-AT big-STAT-NR-PL] DP
tī-t n'e=kebie-re-lle petrov den' pod'e-rqo-go
 PRXM-ABL RECP=depart-APPL-SS:IPFV Peter's day light-NR-LOC
lut'ī-n numō-ge n'e=nūk-t-ī'i."
 Russian-ATT home-LOC RECP=find-FUT-SN-1PL
 'Then the elders discussed everything and said: "Let us part for now and meet at the
 Russian house on St. Peter's day.'" [MSK1-77, 78]
- (14) *oqonastie pulut titte-ge-t joule-s'l'el-u-m, qadōn-ge*
 Afanasij old.man 3PL-LOC-ABL ask-MULT-INFR-0-TR(3) which.place-LOC
ejre-lle me=kel-met?
 walk-SS:PFV AFF=come-(ITR)2PL
 'Afanasiy the old man asked them: "Where have you been?"' [MSK4-112, 113]

これらの例に見るように、引用構文 B における引用は、引用構文 A における引用よりも相対的に長く、複数個の文にまで及ぶ。出現頻度が相対的に高いことも考え合わせれば、この引用構文 B は現代のコリマ・ユカギール語において好まれる種類の引用構文であると言える。

ところで、以上にあげた例をさらに検討すると、引用構文 A と引用構文 B の間には、Maslova (2003) が指摘する引用の長短以外に、もう 1 つの違いが認められる。それは、引用構文 A では発話行為動詞の主語が表面に現れないのに対し、引用構文 B では発話行為動詞の主語が明示されていることが多いという違いである。その場合、代名詞よりもむしろ、いわゆる full noun が現れることが多い。たとえば、(12) における *taŋ pulutpe* や (13) における *omnīn t'omōd'epul* などが、この明示された主語の例である。

この違いはおそらく、2 種の引用構文の談話的な機能の違いと相関する。引用構文 A が用いられるのは、そこまでの談話で文脈上十分に確立した主語を変えることなく、(その主語が示す動作主が) 発言を引用する場合である。コリマ・ユカギール語ではこのような場合に主語は表面上省略される(ゼロ代名詞戦略)ことが多く、これが引用構文 A 出現の環境を整えている。これに対して、引用構文 B が用いられるのは、談話上改めて言及する必要がある主語を明示した上で、(その主語が示す動作主が) 発言を引用する場合である。たとえば民話の中の複数の登場人物が対話したり、交互に発言したりする場面が代表的なものだ。このような場合には、すでに談話上既知のものであっても、発言者を改めて明示する方が談話を円滑に進められるだろう。

2.3 引用構文 C

引用構文 C は、主文の発話行為動詞に引用が続き、さらにその引用が *monut* (動詞 *mon-*「言う」の副動詞) でしめくられる(引用の中途に *monut* が現れることもある) 構文である。引用構文 C は、すぐ上で検討した引用構文 B と並んで、現在のコリマ・ユカギール語で好まれる種類の引用構文と見られ、今回検討したテキスト中での出現頻度は 25 例を超える。その中から 3 例をあげる。

- (15) *titte-l met-kele edie-s'-ḡā, kel-u-k, mon-u-t.*
 3PL-NOM 1SG-ACC call-MULT-PL:TR(3) [come-0-(IMP)2 say-0-SS:IPFV]
 'They are calling me, saying "Come.'" [MSK4-61]
- (16) *epie+taḡ-p-in ör-n'e-nu-l-e medi-s', mit*
 grandmother+DST:AT-PL-DAT cry-VRR-IPFV-ANR-INST be.heard-SN(3) [1PL
emd'e, anil-e ī-de-ḡā, mon-u-t.
 sibling] [fish-ACC get.caught-CAUS-PL:TR(3) say-0-SS:IPFV]
 'We heard him shouting to our grandmother: "They've caught a fish.'" [MSK5-87, 88]
- (17) *titte-l kewe-j-l-ō-pe-de jelāt tī pon'ō-l šoromo-pul*
 3PL-NOM depart-PFV-0-RNR-PL-RP after PRXM remain-ANR person-PL
īle-pul adi n'ied'i-lle āj kewe-j-nu-l'el-ḡi, "qodo
 some-PL firm:ADV talk-SS:PFV CA depart-PFV-IPFV-INFR-PL:SN(3) [how
īs' mie-de-t-ōk?" mon-u-t.
 long.time wait-DETR-FUT-ITR.1PL say-0-SS:IPFV]
 'After their departure, some of those who had stayed behind made firm plans and then they left, too.' "Why should we wait for a long time?" they said.' [MSK1-125, 126]

この構文では、ここまで検討してきた2種の引用構文よりも、発話行為動詞の種類が多彩であることが注目される。上の3例における、(15)の *edies'* 「呼ぶ」、(16)の *örn'e* 「叫ぶ」、(17)の *n'ied'i* 「話し合う」はこの多彩な発話行為動詞の一端である。

引用構文Cを統語構造から見た場合、興味深い特徴が2点ある。第1に、引用構文Cは、発話行為動詞を含む主節に対し、*monut* (副動詞)でしめくくられる節が従属するという構造を示し、構文全体が1つの複文として統合されている。引用構文AやBが形式的には複文ではなく、文の並列(parataxis)であるのに比べ、引用構文Cはより複雑な構造を持っていると言えよう。第2に引用構文Cでは、*monut*を中心とした従属節が主節の後に置かれる。この節の順序はコリマ・ユカギール語の語順の類型(SOV型、従属節は主節に先行)から逸脱している。

テキスト資料の中には、このような例とほぼ同程度の頻度で次のような例が見出される。これらの例では、*monut*で締めくくられる引用を含む点で引用構文Cの特徴を示すものの、たとえば(18)の *aḡt'ī* 「探す」のように、主節の動詞が発話行為動詞ではない。

- (18) *tet-ek aḡt'ī-nu-ḡi-le, qadōn-ge l'e mit kenme,*
 2SG-FOC search-IPFV-PL-OF.3 which.place-LOC DP 1PL partner
mon-u-t.
 say-0-SS:IPFV
 'They are looking for you. They are asking: where is our friend?' [MSK5-36, 37]

- (19) *qojl-qjin n'āt'-in ege-te-ŋa, qojdid'āje-pul-gele, l'et'uon-pe-gele*
 god-DAT face-DIR stand-CAUS-PL:TR(3) priest-PL-ACC deacon-PL-ACC
t'umu erie-l'-ie-l'-el-ŋa, mon-u-t, tit šoromo
 all hate-0-INGR-INFR-PL:TR(3) say-0-SS:IPFV 2PL person
kimdān'e-rī-t tāt me=gudie-je-met.
 lie:QLT-APPL-SS:IPFV ANPH:ADV AFF=become-SN-2PL
 'They are against God. They hated all priests and deacons, saying: "You are just
 deceiving people."' [MSK4-14, 15, 16]

これらは「～と言いながら～する」のような意味の複文と解釈できるが、引用構文 C とほぼ同一の統語構造を持つ。このような文は、典型的な引用構文 C との連続性を示す変種と捉えられるだろう。

以上、現在のコリマ・ユカギール語について、3種の引用構文の出現の状況を確認した。その結果分かったことは次の通りである。まず、引用構文 A は主語をそこまでの談話で確立したのから変えないという条件下で現れ、出現頻度は低い。次に、引用構文 B は主語を明示的に示すことが多く、主語をそれまでのものから変えることも可能であり、出現頻度は高い。引用構文 C の出現頻度も同程度に高く、典型的な引用構文 C と連続性を示すような変種も認められる。

それでは現在から約 1 世紀を遡った時期のコリマ・ユカギール語における引用構文の出現の状況はどのようなものだったのだろうか。次節ではそれを探りたい。

3 過去のコリマ・ユカギール語における引用構文

民族学者ヨヘリソンが現地調査において収集した、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのコリマ・ユカギール語のテキストは 100 篇を超える量に達するが、ここではその中からユカギール民族誌 (Jochelson 1926) に収録されている民話テキストを資料として選んだ。検討した資料の分量に限られるゆえ、当時の引用構文の全貌を明らかにすることはまだ困難であるが、この段階でも概略的な見通しを示すことは不可能ではないだろう。

3.1 引用構文 A

今回検討の対象としたテキスト資料中には、引用に発話行為動詞が直接後続するという構造に正確に合致する引用構文 A の例は見出せなかった。検討したテキスト資料の分量がまだ限られていることによるのかもしれない。

テキスト中にごく少数認められたのは、次のように、発話行為動詞が発言の引用の中ほどに出現する例である。

- (20) *terikie-die ō-golo loude-m, tā čanmax abudā-i.*
 old.woman-DIM trousers-ACC drop-TR:3SG there on.back lie.down-INTR:3SG
čuoleji-polut kie-č. "polut, mon-ni,
 fairy.tale-old.man come-PFV:INTR:3SG old.man say-INTR:3SG
n'e=bonuyeile."
 RECP=be.together?

‘The old woman threw off her trousers and lay down on her back over the hole. When the Mythical Old Man came, she said to him, “Old Man, let us lie together and copulate.”’ (Jochelson 1926: 251)

- (21) *pabā-gi modo-i pojerxo-mo tude-ĵie. “oxa,” mon-ni,*
 elder.sister-POSS sit-INTR:3SG day-LOC she-INTS oh say-INTR:3SG
“aĵū-lek medu-l pude-t.”
 word-FOC be.heard-SF outside-ABL

‘Once the girl was sitting alone in their tent in the daytime. [...] Suddenly she heard people conversing outside.’ (Jochelson 1926: 283)

このようなケースでは、発話行為動詞 *monni* (*mon-*「言う」の3人称単数)が引用の末尾ではなく、中途に現れている。

これらは現代のコリマ・ユカギール語における引用構文 A と厳密に同じものではないが、同様の性質を持った構造と考えられる。すなわちこれらの2例において、主語は表面に現れておらず、先行する文脈の主語を受け継いでいる。このことから見て、これらは引用構文 A の変種と捉えることができるのではないかと思われる。加えて、このような例の存在は、過去のユカギール語において、少なくとも「発話行為動詞の出現は引用の直前に限られる」という制約はなかったことを示しているだろう。

3.2 引用構文 B

ヨヘリソンの資料における引用構文の例の圧倒的多数を占めるのは、引用構文 B、すなわち発話行為動詞に引用が続く構造である。例は多数に上るので、その中から典型的な例を2つあげる。

- (22) *pai mon-ni: “t’āt’ā, egie-k!” t’āt’ā-gi*
 woman say-INTR:3SG elder.brother get.up-IMP:2 elder.brother-POSS
mon-ni: “el egie-te-ye.”
 say-INTR:3SG NEG get.up-FUT-INTR:1SG

‘The girl said: “My elder brother, get up!” The boy answered: “I will not get up.”’ (Jochelson 1926: 241)

- (23) *natlebie mon-ni: “tij n’emolvil-ge met legul omoče*
 raven say-INTR:3SG this year-LOC I food well
ukei-lel.”
 come.out-INFR(3SG)

‘Raven said, “I am well provided this year.”’ (Jochelson 1926: 244)

これらの例に見られる通り、現在のユカギール語の引用構文 B と同様の特徴がここにも認められる。すなわち、発話の引用は比較的長い。また発話行為動詞の主語が明示されることが多く、その結果、たとえば(22)のように主語を交替させることも可能である。

現在のものと同じくらい、あるいはそれ以上にこの構文が好まれていたことを伺わせるのが、次の3例に見るような発話行為動詞の多様性である。

- (24) *terike-gi aju-gi medi-č: ubui, mojolopka*
 old.woman-POSS word-POSS be.heard-PFV:INTR:3SG truly mousehawk
met-ul meriec-u-m.
 I-ACC bring.away-0-TR:3SG
 ‘Then the voice of his wife was heard, “It is true, Mousehawk kidnapped me.”’
 (Jochelson 1926: 256)
- (25) *t’at’ā-gi youloc-u-m: uor-pe leme-ŋin omō-moŋi-ŋi?*
 elder.brother-POSS ask-0-TR:3SG child-PL what-ALL good-PRSP-INTR:3PL
 ‘[...] the father of the boys asked his younger[sic] brother, “Well, what are the aptitudes of my children?”’ (Jochelson 1926: 265)
- (26) *tiŋ kel-u-l coromo-x mon-u-l: met olonuboje coromo-ŋo-je.*
 this come-0-ANR person-FOC say-0-SF I thief person-be-INTR:1SG
tet leme-ŋo-x?
 you what-be-ITR:2SG
 ‘I am a thief,’ said the man who had come up the road, “and who are you?”
 (Jochelson 1926: 265)

これらの例では、(25)の *medi(j)*-「聞こえる」や(26)の *youlocum* 「～を尋ねる」(他動詞)のような多様な発話行為動詞が生じている。さらに、現在のコリマ・ユカギール語ではほとんど見られない、(27)のような発話行為動詞の主語の焦点化も起こっている。これらの多様性は、当時のコリマ・ユカギール語において、引用構文 B がかなり多く用いられ、かつ好まれた構文であったことを示していると思われる。

3.3 引用構文 C

今回検討の対象としたテキスト資料の中には、発話動詞に引用が後続し、副動詞 *monut* で締めくくられるという構造の引用構文 C の例を見つけることはできなかった。副動詞 *monut* が引用の中途に現れるような変異も見つけられなかった。ここから推測できるのは、おそらく当時のコリマ・ユカギール語において、引用構文 C の出現が非常に稀であったか、あるいは全く現れることがなかったということである。引用構文 C が高い頻度で出現する現在のコリマ・ユカギール語と対照した場合、これは顕著な相違である。

過去の限られた資料だけに基づいて、引用構文 C が当時生起しなかったと結論することはもちろんできない。しかしながら、その頻度が著しく低かったという事実はここで確認しておいてよいだろう。なお次のような例は、引用構文 C (あるいはその変種) が当時生起しなかったことを示す間接的証拠となるかもしれない。

- (27) *tāt kereke-pul enicie-ŋam odu-pe-le: mit-ul ele*
 CP Koryak-PL implore-3PL:TR yukaghir-PL-INST we-ACC NEG

kudede-ŋilek.” ▲

kill-PROH:2PL

‘Then the Koryak implored the Yukaghir not to kill them.’ (Jochelson 1926: 261)

- (28) *cāye-d-āce-k* *tadi-ŋimele.* “*kebei-ŋik* *taŋdaga*, *tit* *lebie-ge*
few-ATT-reindeer-FOC give-3PL:OF go-IMP:2PL enough you country-LOC
laxal-ŋin *tiŋ* *āce-pul* *leg-u-t* *xon-ŋik.*” ▲
tail-ALL this reindeer-PL eat-0-SS:INPV go-IMP:2PL

‘Only a few of the reindeer were given to the Koryak with words, “Go to your country and take these reindeer for food on the way.”’ (Jochelson 1926: 262)

この2例において筆者が▲で示した箇所には、現在のコリマ・ユカギール語であれば *monut* が現れる可能性が高いと思われる（「～と（言いつつ）嘆願した」あるいは「～と言いつつ与えた」）。しかしながら、テキスト資料では実際に *monut* は現れず、節（あるいは文）同士は統語的に結合されていない。このことは、統語的手段によるこのような節の統合が当時は不可能だったことを示しているのかもしれない。

以上、過去のコリマ・ユカギール語について、3種の引用構文の出現の状況を確認した。その結果分かったことは次の通りである。まず、引用構文 A の生起は確認できないが、引用の途中に発話行為動詞が挿入される例が少数あり、いずれも主語を表面に明示しない特徴が見られた。これを引用構文 A の変異と見なす仮定の下で、出現頻度はかなり低かったと推測できる。次に、引用構文 B の出現頻度は極めて高い。発話行為動詞の主語を明示する特徴も現在のコリマ・ユカギール語と共通している。一方、引用構文 C の出現頻度は極めて低いか、あるいはそもそも不可能ではなかったかと考えられる。

4 引用構文の発達

ここまでの2つの節では、現在のコリマ・ユカギール語と過去（19世紀末～20世紀初頭）のコリマ・ユカギール語の引用構文の生起を、それぞれテキスト資料に基づいて確かめてきた。今回検討した資料の量は限られており、確定的なことはまだ言えないものの、ひとまずここまでの段階で分かったことを示せば次のようになる。

(29)	引用構文 A	引用構文 B	引用構文 C
現在	○	◎	◎
過去	△ (?)	◎	× (?)

ここで◎は出現頻度が高いこと、○は出現頻度が低いこと、△はかなり低いこと、×は出現しないことを示す。また、疑問符付きの箇所は、資料の分量の制約により、現時点での判断が確定できないケースを示す。

このような状況のもとで、19世紀末から現在に至るコリマ・ユカギール語の引用構文の通時的な発達を考える場合、最も問題の少ないのは引用構文 B であろう。この構文は過去においても、また現在においても、ともに高い頻度で生じており、きわめて安定した構造である。引用構文 B は過去から現在まで一貫して存続している構文だと言える。

その一方、過去と現在の間で、違いが最も際立つのが引用構文 C である。この構文は、過

去においてはおそらくほとんど生じなかったと見られる一方、現在においては高い頻度で現れる。したがって、どのような要因によって引用構文 C が生じたのか、また構文として安定するに至ったかということは論じておく必要がある。

過去のコリマ・ユカギール語のテキスト資料の中に、1例に限られるが、次のような例が認められる。

- (30) *numo-geť ajū medi-č: “met kenme, mon-ni, tet*
 house-ABL word be.heard-PFV:3SG I friend say-INTR:3SG you
terike tī le-i met numo-ge.
 old.woman here be-INTR:3SG I house-LOC

‘[The latter] said from inside, “My friend, your wife is here in my house.”’ (Jochelson 1926: 255–256)

ここでは最初の節に発話行為動詞 (*medič* 「聞こえる」) がある。そしてそれに続く引用の途中にもう 1 つの発話行為動詞 (*monni*) がある。後者は副動詞ではないので、まだ引用構文 C の構造には至っていないものの、語順としてはそれに近いものを示している。わずか 1 例しか認められないので、偶然に成立した可能性を排除することはできないが、ここには引用構文 C が成立する直前の萌芽的状况を観察することができるのではないだろうか。

引用構文 C が成立するためには、このような状況から、発話行為動詞が定形 (*monni*) でなく非定形の副動詞 (*monut*) に交替することのほかに、それによって成立した従属節が安定的に主節に後続することが許されなければならない。従属節が主節に頻繁に後続することは、SOV 型の基本語順を持つコリマ・ユカギール語の語順の類型から逸脱する。それを可能ならしめた要因は何だったのだろうか。

今回検討した過去のコリマ・ユカギール語のテキスト資料において、従属節が主節に後続する例は 2 つ認められた。

- (31) *numonpogil uko-č eye min-delle.*
 house.master come.out-PFV:3SG [bow take-SS:PFV]

‘The master of the house took his bow and came out.’ (Jochelson 1926: 256)

- (32) *tāt mon-ni, xollume eye-le ayi-nu-m menmegei-delle.*
 CA say-INTR:3SG soon bow-INSTR shoot-IPFV-TR:3SG [jump.up-SS:PFV]

‘He jumped up and shot with his bow.’ (Jochelson 1926: 257)

したがって当時、従属節の後置は可能ではあった。ただし頻度の少なさから考えると、やや例外的なケースであったと見るべきだろう。現在のコリマ・ユカギール語における従属節の後置が過去より頻繁に起こっていることを考えると、ここに働いた要因は、この言語の節連鎖全体に対して起こった、従属節の後置をより多く許容する方向への統語的变化であると考えるのが合理的であろう。ただし、このような変化がどのようにして生じたのかを、コリマ・ユカギール語に内在する特徴から動機づけることは現時点では難しい。言語接触による他言語からの影響を考慮に入れる必要があるのかもしれない¹。

¹ コリマ・ユカギール語に言語接触による影響を与えた言語の可能性としては、北東シベリアの同じ地域で広く使われているエウエン語やサハ (ヤクート) 語がある。また、20 世紀においてコリマ・ユカ

引用構文 C において、副動詞となった発話行為動詞 (*monut*) が引用の末尾に置かれることが一般化した要因は2点考えられる。第1の要因は、引用構文 A の確立に伴って生じた、引用に発話行為動詞が後続するという語順の確立である。すでに観察した通り、過去のユカギール語では引用構文 A そのものの例が非常に少なく、当時この構文が十分確立していたとは断定できない。引用構文 A が確立している現在との相違を説明するためには、発話行為動詞を末尾に置く引用構文 A の語順もまた、徐々に発達し、確立してきたと考えるのが妥当である。複文構造の場合、現在のコリマ・ユカギール語のテキスト資料には次のような例がしばしば見つかる。これは前節で引用構文 C の変種として紹介した構造であるが、主節に先立つ従属節の中には明らかに、引用に発話行為動詞が続くという語順が認められる²。

- (33) [...] *neme qodo qart-ōl-možū-gele atehit-pe-ŋin mon-delle*
 [what how share-RNR-PRSP-ACC] merchant-PL-DAT say-SS:IPFV
pon'ā-š-nu-l'el-ŋa, [...] remain-CAUS-IPFV-INFR-PL:TR(3)
 '(They) informed (those who were to remain) how goods were to be shared, placed orders with the marchants, and then departed.' [MSK1-124]³

同様の語順は、従属節が後置された引用構文 C の変種においても認められる。

- (34) *epie ta-bud-e ijl'i-m, juö-k, [...]*
 grandmother DST-NR-INSTR afraid:CAUS-TR(3) see-(IMP)2
el=ibil'e-le-k! mon-de.
 NEG=sob-PROH-2 say-SS:MULT
 'Our grandmother frightened him (with these birds.) "Look! [...] Stop crying!"
 [MSK5-24, 25, 26]

これらの例が示すように、引用に発話行為動詞が後続するという語順は、引用構文 C の変種のような従属節の中で早い時期に確立し、このことが引用構文 A の語順を現在のもののよう安定させたと考えられる。引用構文 C の末尾に *monut* を置くことを一般化させた要因の1つは、このような語順の確立にあるのではないだろうか。

第2の要因は、引用構文 C が徐々に確立することに伴って生じた *monut* の意味の希薄化に求められる。これまで検討した例に見られるように、引用構文 C には発話行為動詞が2つ存在し、発話行為自体は主節の動詞が十分表現していると言ってよい。とすれば、この状況において *monut* の担う重要な機能は、発話行為を表わすことよりも、引用された部分の終わりを示すことになるだろう。その場合、*monut* が置かれるべき最も適切な位置は、もちろん引用の末尾ということになる。

ギール語地域における政治経済的・文化的な「上層言語」として機能し続けたロシア語の影響も無視できないだろう。

² 例文 (33) に現れた発話行為動詞 *mondelle* は動詞 *mon-*「言う」の副動詞の1つで、それが従属する節が表す出来事に時間的に先行して起こった動作を示す。また例文 (34) における発話行為動詞 *monde* も同じく副動詞の1つで、それが従属する節が表す出来事とオーバーラップして起こった動作を示す。

³ この例文では、原文からの引用を省略した箇所に対応する英語訳に括弧を付けた。

ここで述べたような *monut* の意味の希薄化は、今後さらに進んで、*monut* が引用の後置詞、あるいは補文標識として文法化されていく可能性も指摘できる。テキストの中には次のような例が見られる。

- (35) *tuda juko:-jə omni: modibe-k zyrianka mon-u-t jalbil-gə*
 once small-ATT people settlement-FOC Zyrianka say-0-SS:IPFV lake-LOC
l'ə-l'əl.
 be-INFR(3SG)
 'A long time ago there was a small settlement on Lake Zyrianka.' (Nikolaeva 1997: 19)
- (36) *ta-mun-gele lut'i-pe ukshanskij rod mon-u-t*
 DST-NR-ACC Russian-PL Ukshan kin say-0-SS:IPFV
šorile-š-l'el-ŋa, mit omni-n n'ū-gele.
 letter-CAUS-INFR-PL:TR(3) 1PL people-AT name-ACC
 'The Russians call them "Ukshanskij rod", that's our clan name.' [MSK1-18]

これらの例における *monut* はもはや副動詞の機能を喪失し、湖の名称（「ズィリヤンカという湖」）や民族名（Ukshanskij rod と呼ぶ）をあげるために使われた引用の後置詞のような要素として機能していると記述したほうが適当であろう。またテキスト中には *monut* を補文標識と解釈できる例もある。

- (37) *ta-mun-gele taj pulut, ad-uōn omo-s' gudie-ŋi,*
 DST-NR-ACC DST:AT old.man [VSBL-NR good-SN(3) become-PL:SN(3)]
mon-u-t el=mon-nunnu.
 say-0-SS:IPFV NEG=say-HAB(3)
 'But the old man did not say that this was good.' [MSK4-29]

この例における *monut* は補文を主文に結合させる補文標識と取るほうが適当に思われる。これらの例はまだ散発的に生じているに過ぎないが、今後仮に文法化の過程が進んでいけば、コリマ・ユカギール語全体の文法構造に大きな影響を及ぼしていく可能性もあるだろう。

5 結びに代えて

この論文では、現代のコリマ・ユカギール語と、約1世紀を遡った過去（19世紀末～20世紀初頭）のコリマ・ユカギール語において、引用構文の諸相を観察した。さらに、両者を対照することによって類似点と相違点を探るとともに、過去から現在に至るコリマ・ユカギール語の引用構文の通時的発展について考察した。検討したデータの範囲がまだ限られていることから、確定的な結論に至らなかった点もあるが、これらについては今後検討するデータの範囲を広げることによって考察を深めていきたい。

ヨヘリソンの民族誌（Jochelson 1926）を読んでいると、彼自身の調査時の実感をときには伴いつつ、ユカギール人が長期間にわたって経験することを強いられた衰退のトーンが基調低音のように聞こえてくる。コリマ・ユカギール語もまた「消滅の危機に瀕した」という形容で語られることが多くなった。この状況を否定し去ることはできそうにないけれども、現在と過去のコリマ・ユカギール語のテキストを読み、つぶさに比べてみると、そうした状況

の中にあってもなお、細部の表現に工夫をこらし、そこかしこで小さな変化を積み重ね、新たな構文を発達させてきたことが分かる。この言語の生命力はおそらく、まだ失われていないのだろう。この瞬間にも、あの深い森の中で、あるいはあの清冽な川のほとりで、新たな息吹が生まれていることを期待したい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 16K02675 の助成を受けたものです。また、現地調査において暖かいご協力をいただいたネレムノエ村の皆様にご感謝を申し上げます。

略号一覧

ABL – ablative	INGR – ingressive	RECP – reciprocal
ACC – accusative	INSTR – instrumental	RES – resultative
AFF – affirmative	INTR – intransitive	RNR – result nominalizer
ANR – action nominalizer	INTS – intensifier	QLT – qualitative
APPL – applicative	ITR – interrogative	SBNR – subject nominalizer
CA – connective adverbial	ITER – iterative	SF – subject focus
CAUS – causative	LOC – locative	SG – singular
COM – comitative	MULT – multiplicative	SN – subject neutral
DAT – dative	NEG – negative	SS – same subject
DETR – detransitivizer	NOM – nominative	STAT – stative
DIM – diminutive	NR – nominalizer	TR – transitive
DP – discourse particle	PFV – perfective	TRANSF – transformative
DST – distal	PL – plural	VRR – verbalizer
FOC – focus	POSS – possessive	0 – 挿入母音 <i>u</i> あるいは挿入子音 <i>l'</i>
FUT – future	PRED – predicative	[] – 節の境界（明示する必要があるときのみ）
HAB – habitual	PROH – prohibitive	
IMP – imperative	PRSP – prospective	
INFR – inferential	PRXM – proximal	

参考文献

- Jochelson, Waldemar (1926) *The Yukaghir and the Yukaghirized Tungus*, the Memoirs of the American Museum of Natural History, and Publications of the Jesup North Pacific Expedition. Leiden: E. J. Brill, and New York: G. E. Stechert.
- Maslova, Elena (ed.) (2001) *Yukaghir Texts*, Tunguso Sibirica 7. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Maslova, Elena (2003) *A Grammar of Kolyma Yukaghir*, Mouton Grammar Library 27. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Nikolaeva, Irina (1997) *Yukaghir Texts*, Specimina Sibirica 13. Szombathely: Savariae.

**Quotation constructions in Kolyma Yukaghir and their development:
Past and present**

Fubito ENDO

(Wakayama Univeristy)

This paper aims to examine quotation constructions in Kolyma Yukaghir from a historical linguistic point of view. On the basis of Maslova (2003)'s description of Kolyma Yukaghir grammar, three types of quotation constructions using speech act verbs (SAV) are identified: [quotation]+SAV (Type A), SAV+[quotation] (Type B), and SAV+[quotation]+*monut* (Type C) where *monut* is a converb form of an SAV, *mon-* 'say'. Observation of Kolyma Yukaghir texts of the present day (recorded in the 1980s and the 1990s) shows that Type B and Type C are favored, while Type A occurs less frequently. On the other hand, detailed examination of Kolyma Yukaghir texts recorded by an ethnologist Waldemar Jochelson at the turn of the 20th century reveals that Type B was the only favored construction, whereas Type A was less favored and Type C was practically not attested. The difference in the occurrence of these constructions suggests that there has been considerable historical development among the types of quotation constructions in Kolyma Yukaghir during the 20th century. The author tries to explain how the historical linguistic development has begun and expanded, on the basis of closer examination of Jochelson's Kolyma Yukaghir texts. Special attention is paid to an explanation of how Type C, the most syntactically complicated quotation construction, emerged and has been established and stabilized in the course of syntactic change of Kolyma Yukaghir grammar during the 20th century.